

イチゴの品種育成と 高品質安定生産技術の開発による産地振興

西本 登志 氏（58歳）

奈良県農業研究開発センター研究開発
部大和野菜研究センター 所長



1 業績の概要

背景

イチゴは、奈良県の野菜生産の中で最も生産額の大きい品目である。奈良県農業研究開発センターでは、その産地振興に寄与するべく、1960年代から促成栽培を始めとする作型開発や品種の育成などを行ってきた。1980年代以降、生産者の高齢化と生産面積の減少が顕著となる中、1990年代後半には、罹病品種の普及に伴う育苗時の土壌伝染性病害の発生、育苗圃の土壌消毒に用いられる臭化メチル剤の全廃など、生産現場が直面する課題が噴出し、産地の再興に資する技術・品種開発が求められた。

研究内容・成果

イチゴの新品種育成に先立ち、土壌伝染性病害を回避できる低コストかつ安全性・省力性に優れたベンチ無仮植育苗法を開発した。この育苗法は、臭化メチル剤を使用せず、鉄パイプ等で自主施工が可能で、培養土には奈良県内で安価に入手できる国産ヒノキのおがくずを用いるため、生産者が導入し易い。

また、新たな育苗法の普及が進む中で、顧客に魅力を感じてもらえる品種を開発してほしいという生産者の声に耳を傾け、前例のない卓越した食味特性を有するイチゴ「古都華」を新たに開発した。

さらに、全国各地の大学・国公設試・企業等との共同研究により、ミツバチ代替昆虫としてのヒロズキンバエの利用、加温機排気から分離・貯留したCO₂の再利用、収穫・管理支援用運搬台車、間欠冷蔵による低コスト花芽分化促進など、次世代のイチゴ生産を支える様々な技術開発を行ってきた。



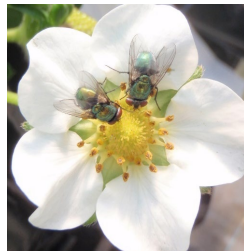
土壌伝染性病害を
回避できる
ベンチ無仮植育苗

（低コストで自主施工可）



前例のない
卓越した食味の
イチゴ「古都華」

（作付面積で県内普及率40%以上）



補完ポリネーター
としての
ヒロズキンバエ

（ビーフライ）の利用

（研究代表者）



加温機排気を
利用した
CO₂施用技術

（開発責任者）



収穫・管理
支援用運搬台車

（研究代表者）

普及状況

ベンチ無仮植育苗法の初期投資額は、本圃10aあたり20万円以下に抑えられることから、土耕栽培を行う生産者の間で普及が進み、現在の普及率は本圃作付面積換算で30%以上に達している。また、「古都華」は、加工業者や小売店との直接取引のほか、輸出、観光農園、直売、市場出荷と多様に拡がり、作付面積で県内普及率は40%以上に達し、奈良県産イチゴのブランド化に欠かせない存在となっている。さらに、「古都華」の高単価販売が実現したことでイチゴ経営の収益は大きく改善し、「古都華」を中心としたイチゴ生産に新規就農者が毎年参入している。

2 評価のポイント

生産者視点で高品質安定生産技術の開発に取り組み、イチゴの土壌伝染性病害を回避できる新たな育苗法を生み出した。また、「古都華」については、その販売戦略に深く関わり、育成者ならではの発信力で、生産者と実需者のマッチングにも尽力し、安定生産と有利販売を同時に支えてきた。さらに、ヒロズキンバエの利用技術など、次世代に必要となる多くの技術を開発してきた。

一連の取組により、奈良県のイチゴ生産者の減少をくい止め、反転増加させることで奈良県農業の振興に大きく貢献してきた。